



編集：筑波大学野外運動研究室広報係
発行：筑波大学体育系野外運動研究室
〒305-8574 つくば市天王台1-1-1
TEL/FAX 029-853-6339
URL <http://yagai.tsukubauniv.jp/>

【巻頭言】

「再」

坂本 昭裕(筑波大学体育系教授)

毎年12月12日の漢字の日には、今年1年の世相を表す漢字が公表されている。今年も一文字が公表され「輪」が選ばれた(応募総数の5%の人が輪を選んだのだそうだ)。富士山の世界文化遺産への登録、サッカーW杯出場決定、東京オリンピック開催など多くの人々が「輪」になって沸いたこと。あるいは、伊豆大島をはじめとする各地で起きた自然災害に際して支援の「輪」が広がったことなどがその理由だそうだ。

たしかに、世間的にみれば、その通りなのだろうと思う。しかし、自分にも「輪」があてはまるかと言われれば、どうもそうでもない。では一体どんな漢字が自分にあてはまるだろう。「海」「倍」「楽」・・・。こんな漢字も浮かんだが、テレビばかり見ていたのかとお叱りをうけそうだ。これではいけないので、もう一度よく考えてみた。すると、自分に最もふさわしい漢字として『再』が浮かんだ。『再』という漢字には、再会、再度など‘ふたたび’‘もう一度’という意味や再来週、再来年とか‘次の’という意味がある。

実は今年、「再び」ということが多かった。アメリカ在外研究以来、久々であるが再び国外に出張し、そこで十数年ぶりに再会できた人がいた。また、国立妙高青少年自然の家の不登校児童生徒のキャンプに再び関わった。ここでも再び施設に戻られた方と事業を一緒に行った。これらは、1年を振り返ってみると自分にとって意義深いことだった。

これまでは、研究、研修いづれもずっと国内にいて足元を固めるつもりで行ってきたのだ。が(このように言うとかっこいいが、実際は内に籠っていただけである)、再び、諸外国に学ぶことや国際交流することの大切さを感じるようになった。お会いした外国の先生方との縁は大事に、継続してゆきたいと思う。

また、これまで10年ほどセラピーキャンプに取り組んできたが、一度立ち止まって再考してみる必要があると感じていた。その矢先に、再び妙高からお声をかけていただいた。研究室以外の人や場で野外実践を協働することは、自分のやっていることの意味を社会とのかかわりの中で考える上で、よい機会になった。

こうしてみると2013年は、自分にとって何か忘れていたものを再び取り戻すような1年だったような気がする。漢字でそれを再確認できたように思う。みなさんの1年は、どんな漢字で表すことができるのだろうか。清水寺でとはいかないが、一文字書いてみてはどうか。

【正課事業報告】

○実技理論・実習Ⅰ「野外運動」デイキャンプ

<期 日>2013年11月27~28日

<場 所>筑波大学 野性の森

<報告者>山川 晃 (MC1)

2013年11月27日(水)午後から翌28日(木)朝にかけて、体育専門学群2年男子対象の実技理論・実習Ⅰ「野外運動」のメインプログラム、「デイキャンプ」が行われた。今回のデイキャンプには54名が参加し、渡邊先生とTAの山川のほか、野外運動研究室の清水、加藤、佐藤、藤田、渡の5名がスタッフとして指導を行った。参加者たちはこれまでの授業で学んだキャンプ技術を活かして生活環境を整えたり、各班が考えたメニューに従って夕食を作ったりした。夜にはナイトプログラムとキャンプファイヤーを行い、「筑波大学の学生生活」というテーマが与えられたスタンツでは各班の創意工夫に富んだ出し物が見られ、大いに盛り上がった。例年より遅い時期に行われたため夜や明け方は非常に寒かったが、それをも楽しもうとする参加者たちの姿が非常に印象的だった。

【課外事業報告】

○日本カヌー連盟 チームビルディング研修

<期 日>2013年11月14日

<場 所>筑波大学 野性の森

<報告者>山川 晃 (MC1)

2013年11月14日(木)、公益社団法人日本カヌー連盟のチームビルディングが、筑波大学野性の森で行われた。12名の選手は2班に分かれ、午前と午後の2セッション、坂本先生と山川の指導によりA.S.E.を行った。また食糧担当として向後先生と中野が昼食を提供した。今回対象がカヌースプリントの選手ということもあり、非常に力強く課題解決を行う姿が見られた一方、「全員でバランスを取らなければならない課題は苦手」という声も聞かれた。課題解決のために互いの考えを話し合い、チャレンジしようとするポジティブな姿勢が印象的だった。選手たちは今回の体験を通して、個人競技であるカヌーでもチームワークが重要であることを、改めて認識したようだった。

○人間総合科学研究科 学生の集い

<期 日>2013年11月20日

<場 所>筑波大学 野性の森

<報告者>加藤 拓 (MC2)

11月20日(水)に、野性の森において研究分野・専攻・研究室などを越えて、人間総合科学研究科に属する大学院生同士の新たな出会いや交流を目的に

「人間総合科学研究科 学生の集い」が行われた。普段学んでいることが全く異なるため初対面の学生がほとんどであり、中には留学生の方もいたが、同じグループになった学生同士力を合わせて野外ゲームや夕食作りを行うことで交流を深めていた。活動が始まったばかりの頃はぎこちなかった参加者たちだったが、野外パーティが始まるころには、それぞれの専攻のこと、自分がこれまでに経験したこと（社会人経験者の方も多かった）、地元のことなどなど、お互いのことを熱く楽しく語り合う姿があちこちで見られた。

今回、我々野外研の大学院生は指導者でもあり参加者でもあるという立場での参加で最初は戸惑ったが、気がつくや参加者の勢いに巻き込まれるようにグループの一員となっていたように感じる。普段知ることのない他の研究分野の人たちの話を聞いて刺激を受けるとともに、火と料理を囲んで笑顔を浮かべながら過ごしている様子を見て、「やっぱり野外っていいなあ」と改めて感じる活動となった。

○井川演習林 狩猟見学ツアー

<期 日>2013年11月14日
<場 所>筑波大学農林技術センター井川演習林
<報告者>佐藤 冬果 (MC2)



シカの解体の様子

2013年11月16日(土)～17日(日)、筑波大学農林技術センター井川演習林の遠藤好和先生、そして野外運動研究室OGである遠藤知里先生をはじめとした静岡県井川の皆さんにご協力頂き、シカ狩猟の見学を行った。参加者は渡邊先生、向後先生、M2 清水、M2 佐藤、M1 山川、UG4 藤田の6人であり、1日目はその日に猟師さんが仕留めてきたシカの解体を体験し、その肉で猟師の皆さんとの懇親会を行った。2日目には実際の猟の現場を見学した。

参加者にとっては、到着早々のシカ解体がとてもインパクトが強かったように思う。皮を剥ぐ作業や、肉を部位ごとに切り分けていく作業は、ほとんどの人が初体験であり初めは戸惑いもあったが、徐々に夢中になっていた。その後の懇親会では、ヒレ肉の刺身や、脳の刺身など新鮮だからこそ頂ける森の恵みに感謝の思いで舌鼓を打った。

私がこのシカ狩りに初めて触れたのは2年前、森林生態学の研究室に居た頃で、体育分野に所属している野外運動研究室のメンバーにこそ、是非見せたいとずっと思っていた活動であった。野性動物保護管理のことなどの生態学的な視点、狩猟文化といった文化人類学的な視点など、体育の枠だけに収まっているには触れることの出来ない、しかし非常に関わりの深い分野に触れることが出来たことは、非常に大きな経験になった。体育分野だけでなく様々な視点に触れ、深みのある指導者を目指していきたい、いって欲しいと思うツアーであった。

【その他の課外事業】

○茨城県体育連盟 野外研修
<期 日>11月9日
<場 所>筑波大学 野性の森
<報告者>清水 啓一

2013年11月16日(土)、茨城県体育連盟が主催による、将来が期待される中学・高校生の各種運動競技選手を対象としたASE指導が行われた。研究室からは、渡邊先生、佐藤、清水、加藤、藤田がスタッフとして指導を行った。参加者は、各競技でインターハイ入賞等の高い目標を持った選手であり、普段は専門競技の練習に打ち込んでいるためか、他競技の選手との交流に、はじめは戸惑いが見られた。しかし、自らの競技特性を活かしながら、ASEにチャレンジしていくことで、次第に打ち解け、スポーツマンらしいはつらつとした姿勢が多数みられるようになり、同じ高い目標を持つ同志としての和が生まれていったように感じられた。高校生の部では、研修終了後に盛んな情報交換を行う様子も見られ、同年代の横のつながりを作るという意味でも、今回の研修が意義深いものとなっていたと思われる。

【特別企画その1】

○おススメ野外関連本紹介コーナー

第2回の本紹介コーナーでは、野外運動研究室の皆さんに一度は読んで貰いたい、歴史ある野外教育と真ん中の本を紹介します。

『キャンプカウンセリング』

<著者>A.V. ミッチェル、I.B. クロフォード 共著 兼松保一訳
<出版>ベースボールマガジン社



個人的な話ですが、「とにかくキャンプのカウンセラーになりたい!」と想っていた高校生の頃、この本を父親からプレゼントされました。私が初めて読

んだ野外教育に関する本がコレです。この本を読みながら、いつかカウンセラーになれたら…と想像してはワクワクしていたものです。大学に入ってカウンセラーとして活動するようになってからも、迷ったときにはこの本を開くようになっていました。ふゆりんのバイブルなのです。

第1版が1966年、約50年前に発行されているので、とても古い本です。確かに道具のことや、社会のことなどちょっと現代とはズレている部分もありますが、大部分は、いつの時代も変わらない普遍的なことが書かれていると思います。

どのページも面白いのですが、全340ページ以上にわたる分厚い本なので、是非、第2章の「キャンプ・カウンセラー」の部分だけでも、読んでほしいと思っています。読んでみると、キャンプカウンセラーという役割の大切さと難しさ、そしていかに魅力的な役割なのか伝わってきます。それが、柔らかな文体で、時に例を挙げながら情緒豊かに述べられているので、特にカウンセラー経験のある人は、実体験と繋げながら読めると思います。

「第2章を読むのもしんどいよ」という人は、各節のはじめに載っている「詩」だけでも読んでみてください。各節で取り上げられているテーマに関する短い詩が書いてあるのですが、どの詩も素敵です。詩を読むだけでも、キャンプの魅力を確認できると思います。

最後に、1ページ目に載っているお気に入りの詩を紹介して、オススメ本コーナーを終わりにします。図書館にも入っているので、野外研ならぜひ一度は目を通してみてくださいね。

オールドキャンパーへ

年老いてもきっと思う
遠く去ったキャンプの日々
心によみがえる
たき火の煙のにおい
消えかかる夜明けのたき火
そして、迷い歩いた山道

いつか大人になり
広く世の中を知っても
いつもよみがえる
遠い日の思い出
ひざつき合わせて語った友の
楽しい笑顔

やがて住む
町いちばんの立派な場所に
だが、いつか背広を脱いで
キャンプ服に着替えるだろう
そして、夜空の星を仰ぎ
丸太のベッドで寝るだろう

大きくなって金持ちになり
何でも買える身分になっても
しばし、何ごととも忘れて

野外に出て過ごすだろう
太陽の輝く水辺
雲の漂う空の下で

一度でもキャンプだったなら
心の底に永遠に
何かがついて離れない
たとえおとなになろうとも
忘れられない思い出は
楽しく遊んだキャンプの日々

メアリー S エドガー

文責：佐藤 冬果(M2)

【特別企画その2】

○必見！野外関連ムービー

このコーナーでは筆者が日頃勉学に励む(?)傍らあくまで休憩時の暇つぶしとしてネットサーフィンを楽しんでいる最中に会った素敵な野外関連の動画コンテンツを紹介します。



『Swatch Skiers Cup2013』

掲載元：YouTube

作成元：Swatch Skiers Cup

URL<http://www.youtube.com/watch?v=Eyi02dFym0c&noredirect=1>

いよいよ冬ですね！スキーの季節ですね！！と、テンション上げていきたいところですが、修士論文に追われる筆者には、今年は雪山がまだまだ遠く感じられます…。どうかここでは筆者の息抜きにお付き合いください。

Swatch Skiers CupはSwatchが主催する世界初のフリーライドスキー(バックカントリースキー)大陸間コンペです。2011年に初回が開催されて以来好評を博し、毎年世界中の一流チームが集うビッグイベントとなっています。

今回紹介する動画は、前回大会のハイライトと呼ぶべき瞬間を捉えています。この衝撃映像を見れば、きっとあなたもバックカントリースキーやヘリスキーにチャレンジしてみたくなくなるはず！！(逆効果かもしれませんが・・・)

文責：清水啓一(M2)

リレーコラム～OB・OGからのメッセージ～



リレーコラム NO. 15
2004 年度修了 (DC)
常葉大学短期大学部保育科
遠藤 知里さん

「人に助けてもらうこと」の意味

はじめまして、パーポーこと遠藤(堀出)知里といいます。私はなんと14年間も筑波大学で過ごしました。長く居たぶん、活動を共にした先輩後輩や同年代の仲間がたくさんいて、今もそのつながりに支えられています。野外研では「人に助けてもらうこと」の意味を心底学びました。高校時代までの私は「自立＝自分の力で生きていくこと」だと思っていましたが、とんでもない！大学1年で体験した人生初のASEを皮切りに、瑣末なことでは車の運転、野外研らしいことではさまざまな実習、オプション活動、指導実践、研究など、「一緒にやってくれる仲間」や「見守りつつ任せてくれる先生」がいたからこそ安心して挑戦できました。その経験が、今の自分の基礎になっています。

私は現在、静岡で保育系短大の教員をしています。幼稚園教諭や保育士を養成する学科で教えるということは、「人の育ちにかかわる人を育てる」という点で、野外研で学んできたことに重なります。私にとって幼児教育は全く未知の領域でしたが、野外教育との間には、「生活」・「あそび」・「自然」という明快な接点がありました。また、基本的な発達観や学びのとらえ方も似ています。今ではさらに、「体験の連続性」や「協同的な学び」など、幼児教育の今日的なキーワードと野外教育との関連に気づき、学生に伝えたいことが明確になってきました。そんなわけで、最近の仕事が面白いです。心の温かい学生に囲まれ、「この人たちが保育者になってくれるなら日本の未来は明るい」と期待しながら、楽しく日々を過ごしています。とはいうものの、そう感じるようになったのは実にこの数か月のことであり、はじめの5年間は基本的につらい毎日でした。ようやく6年目にして、学生たちの優れた資質や、頼れる同僚の存在などに助けられ、自信をもって歩みを進められるようになりました。これは大きな変化です。

さて、「生活」と「自然」に関連して、最近の暮らしの中で印象に残ったことをひとつ。わが家の庭の片隅に、毎年「葉」だけをしょぼしょぼと茂らせる植物がありました。日なたに移植するなど、いろいろ手をかけましたが、一向に花をつける様子がみられません。そしてこの夏、とうとう涼やかな青い花が咲きました。花を咲かせるのに十分な栄養が、球根にたまったからでしょう。その花を見ながら、教員としての自分のあり方を深く反省してしまいました。人はどうしても「見える部分」とらわれてしまいがちです。授業では「今できないということにとらわれず、子ども自身の意欲の高まりを感じ取り、関わっていくことが大切」とか言っておきながらも、私自身が見落としていることが多々ありました。外から見てわかりやすい部分だけで評価せず、内面にたくわえられているものに対する感度を高くして、人に接していきたいです。

最後に学生のみなさんへ。今もいろいろな人がいる野外研だと思いますが、その多様性を大切にしてください。私は他学(生物資源学類)出身で、身体能力ばかりか苦手を克服する努力も不十分だったこともあり、できないことだらけの自分が嫌でした(いまだにできるようになってないこともたくさんあります)。でも、そんな私を受け入れ、行動を共にしてくれる仲間が存在によって、自分自身が全体的に(内面的なものも含めて)向上することができたように思います。「人に助けてもらうこと」の意味というのは、そういうことです。人は、大人になっても成長します。今後も、いい集団であり続けてください。

【編集後記】

いよいよスキーシーズンが始まります。室員それぞれが目標をもって充実した冬になることを願っています。

閲覧者の皆様、現在の野外運動研究室員たちの様子を見て、ご意見・ご感想などがありましたら是非、野外運動研究室 HP までお願いいたします。

<http://yagai.tsukubauniv.jp/>